

Salamander in the circle

第十章
二極世界



峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

イリチャ・・・・・・・・火の精霊
ヤスウ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団員
パンテオラ・・・・・・・・メッサナ市の総督
パルダリス・・・・・・・・メッサナ市の総督家の一人。総督代理
メンドルプ・・・・・・・・メッサナの化学者
アルチニア・・・・・・・・メンドルプの助手

これまでの主な登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・・・・〃 団員
ホシナ・・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長。マミヤの父
オマキ・・・・・・・・ホシナの妻
ゴン・キト・カボ・・・・・ホシナ族の男たち
パウル・・・・・・・・ケストル王国・国王
ウルリク・・・・・・・・〃 第三王子
ヘンリク・・・・・・・・〃 ヘンリクの息子
ソルド・・・・・・・・〃 警備隊長
サノヒコ・・・・・・・・島の王に仕える役人
ヘルガ王女・・・・・・・・エウメロス王国・王女
レル・ヴァリス・・・・・〃 王室近衛隊長
バイスロイ・・・・・・・・黄金門の皇帝の息子
バラム&バランケ・・・・・双子のジャガー。パンテオラの部下
ハイヤーン・・・・・・・・ネウトラ評議会・本部科学者のリーダー、メンドルプの弟
ティコ・・・・・・・・〃 科学者
コモラ・・・・・・・・総督の顧問
マミヤ・・・・・・・・ホシナ族の娘

目次

二極世界

165.

166.

167.

168.

169.

170.

第十章のあとがき

奥付

二極世界

165.

ヤスウ、そなた、世界の果ての島の出身、そうだろう？ 初対面のメンドルプからいきなりそう言われてヤスウは面喰った。

ぐっと答えに詰まっているヤスウを見てメンドルプは微笑した。

実の祖父のような親しみ深さ、懐の深さ。体の内側から熱い感情がこみあげてくるのを感じてヤスウは思わず目をつむり、歯を食いしばった。両親と最後に言葉を交わしたのはいつだったろう、どんな話をしたんだっただろう。出発を控えて慌ただしい中、母親にしょうもない世話を焼かれて邪険に振り払ったような覚えがある。声をあげて泣き出しそうだ。なぜこんな気持ちになるんだ？

そしてふとダーヴェのことを思い出す。

「私はほんとに、とても年寄りなんですよ」、と何かの折に聞いたことがある。「修行を積み重ねていくと、いろんなことができるようになるんです。自分の姿形を思い通りに表現することなんかもそのひとつ」

つまり、ダーヴェは彼自身が見せたい姿をヤスウたちに見せていたということだ。

上級賢者と化学者がどういう関係にあるのか知る由もないが、もしかしたらとても近しいのかもしれない、泣きたい気持ちを抑えようとヤスウはそんなことを考えている。

メンドルプの面に刻まれているのは加齢によるものではない。笑い皺なのだ。

「そなたの皮膚、髪、目、言葉、それらが世界の果ての島を指しておる」

メンドルプは言い、ヤスウの手をとって歩く。彼が歩くのに従って足元に廊下が伸び

ていく。薄い金属性だが人が二人乗ってもへたりもしなりもしない。

「重力場じゃ。目に見える廊下を伴っているほうが、安心するじゃろ」

そう言いながら彼は空いている方の手を軽く振った。すると金属の廊下は消え、ヤスウは足の下に地球儀を見ていた。

空中に浮遊し、空中を飛んで移動する能力を持っているヤスウだが、（ちがう、そういうんじゃない）、神様と手をつないで空から地球を見下ろしている、それは神の視点ということかもしれない。

166.

「そなたは、くにかからネウトラ評議会に派遣された三代目」

「そんなことまで——」

「なに、見る者が見れば容易にわかること」気楽な調子でメンドルブは言い、足下を指さす。そこには世界の果ての島。大陸から離れ、大洋の隅にぽつん、と。

「美しい島じゃ。木々、草花、川、湖、山々etc。そして、四季。あらゆる自然がパッケージされて海に浮かんでおる。そなたは知らぬかもしれんが、この島は神々が統治しておられる。神々の直轄地なのだよ」

ヤスウは評議会本部の置かれた土地で生まれ育った。だから祖父母が生まれ育ったという世界の果ての島というものを、ただ情報として知っているだけである。

「今の王さまが、神さま、ってことかい？」

「いや、王の背後に神々がおられるということ。王は厳密に選ばれ、神々の意志を受

け、物質世界を治めることを引き受けた。そもそも王国というものはそうやってできたんじゃないが、時が経つにしたがって王様もその構造が人間に近づいてしまう。我こそ選ばれし者だなんて自称する者さえでてくるし、あげく、低次元のもめ事が起こるわけじゃ。

と、なると、人間とはしょうもないものか？ いや、そんなわけではない。我々はその証拠を、その島国にみる。王は神々の意志を地上に実現しようとし、民は応えようとしている。国そのものが若い。成長しつつある。多くの民は知る由もなかろうが、神々が両手で包むように慈しんでおられるのを肌で感じている。彼らは偉大な民族に成長するだろう」

「……………」

「おかしな横ヤリが入らなければ、の話じゃがな」

ヤスウは言った。「その国は、評議会に加盟してるのに、正式な国名を公表してねえんです。だから世界の人たちはその存在すら知らねえ。なんでかなって、おれ、ずっと不思議だった」

「ヤスウよ。地球上の人間は一樣に進化していくわけではない。様々な進化段階の人間がいて、国があること、そなたも知っているだろう。様々な成長し、熟し、滅びていく。この世界もまたいずれ、すべて滅びる。一方で生まれて間もない者、国がある。それは次の世界を担う者たちだ。そのひとつが世界の果ての島」

「そりゃあ——知らなかった——それ、神さまが大事な苗を温室で育ててるってことですか」

「おお、そんな感じじゃな」

「メンドルプせんせい、さっき、おかしな横ヤリとか、いいませんでしたか」

「おかしなことが起きておる。いくつも、同時に」メンドルプはつぶやいた。「原子核

分裂に手を出すなど、最たるものじゃ！」

「でも、それがあれば巨人族をやっつけられるって——」

メンドルプは肩をすくめた。「そなたは諸刃の剣という言葉を知ってるかな」

167.

「こっちも危ないってことか……」

「じつはな、五万年前にもおんなじことがあったのじゃ。巨人族の猛威を削ごうとな、やはり学者のチームが真っ二つに分かれて争った。最終的にその案は却下された。が、分裂した学者は互いにそっぽを向いてしまった。その一つはネウトラ評議会を創設し、もう一つは、メッサナで学究に邁進することになった。それがまさか、こんなところで再燃しようとは！」

えらい因果だと思いつつ、ヤスウは思いめぐらす。ナシルからの連絡にハイヤーン博士の名前が一度も出てこなかった。先頭に立っているのはティコという男だ。おそろおそろそのことを告げると、メンドルプは深々と息を吐いた。

「ハイヤーン博士とて、かつてのいきさつを知らぬわけがない。おおかた、若い学者に押し切られたに違いない。なんにせよ、五万年前の巨人族殲滅作戦は散々な結果を招いてしまった。その責任が作戦頭脳であった学者にあることは言うまでもない。心ある学者なら、それは大きな傷だからな、そこを突かれればぐうの音も出んわ」

そしてまた深い吐息。

「とはいえ。手を貸すことは——できん」

ぼう然と顔をあげるヤスウをしり目に、メンドルプは地球儀の青い洋上で踵を返す。
「いかなる目的があろうと、原子核分裂などという神々をあざむくような技に、手を貸すことはできん！ 評議会よ、それがメッサナの答えだ！！」

168.

しかし。メンドルプとヤスウが世界の果ての島への旅から戻ってみれば、パルダリス総督代理が顔色を変えていた。

「メンドルプ先生——」

年若い学生のような目で、メンドルプの青いローブにすがりつく。「——王家から使いが来た——」

それが吉報であるわけがなかった。メンドルプは学生を叱りつけるように厳しい声で言った。「——で！？」

「王家から使いが来た。本日正午、刑が執行されたと——」

パルダリスの顔がみるみる歪んだ。それは、メッサナ総督家ナンバー2であるこの男にあまりに不似合いで、無様で、見るに堪えない感情の表出で、威厳に満ちた神さま然とした雰囲気をおち壊しにした。「話が違う！」、と床を両拳で殴りつけ、人目もはばからず、彼は号泣する。「パンテオラ——！ 姉さん——！」と名を呼びながら。

（そんなばかな！ いったい、本当なのかね！！）メンドルプが問えば

（アンベレオ王家からの正式な使者でしたわ）アルチニアが応じる。

（パンテオラ総督の身柄については王家と総督家の間で協議中ではなかったのか！？）

（わたくしもそのように聞いておりました）

(いきなり家に押し入って拉致し、関係者が話し合いを望んでいる最中に刑を……執行……？　ば、ばかげている！　めちゃくちゃだ！　法もへったくれもないではないか！！)

泣き崩れるパルダリスの傍らで、メンドルプとアルチニアとが額をよせて言葉を交わしている。ヤスウは漏れてくる事情の細切れに血の気が引く思いだ。それでもパルダリスよりは冷静なアルチニアに尋ねなければならない。

「イリチャのやつは！？　どこ行ったんです！？」

「あ——ら——？」アルチニアは目が覚めた面持ちであたりを見回す。「さっきまでここにいたんだけど」

「どこ行きやがった！！　こんなときに勝手に動きまわるんじゃねえ！！」

落ち着いて考えれば、ほっといてもかまわなかったんだよな、べつに、あんなの。あとになってそう思ったヤスウだった。が、今は夢中でイリチャの行方を探す。

169.

地球儀を納めた建物の出口まで走りぬきながら、ヤスウは必死でイリチャの姿を目でさがす。建物の中にはかつて見たこともなく、言い表すこともできない不可解な形をし、細かな目盛りのついた巨大な器械がひしめいていてまるで悪夢の中にいるようだ。そうだ、悪夢だ。偉大なメッサナ市のパンテオラ総督が——死刑——

北の湿地帯で出会ったあの娘に降りかかったのもまさに悪夢だったではないか。

(なんなんだいったい——)

(いきなり現れた巨人族も訳わかんねえが、メッサナで起こっていることはもっと——
わかんねえ！)

イリチャを探して建物の外まで出てしまったヤスウは、はっと足を止めた。頭上の太陽はかなり西に傾いていて、地面には面積は小さいけれども建物の影が落ちている。直線でできたその影に、なにか妙な形をしたモノが重なっていたのだ。足を止めるのと同じ時に彼は建物の上にいるモノは何かと、振り仰ぐ。そこには——

「そこにいたんか」

翼竜は紅く光る眼でヤスウを見下ろしていた。

「ぼくは、行くよ。ヒューダーが呼んでるんだ」

ヤスウはその名に目を見開きながら声に出していた。「おめえ、知っているか、パンテオラ総督のこと」

「『王家の使者』が来た時、全部聞いてた」

「——そうか」

メッサナの夕暮れのなかで翼竜の目はなお紅く輝き、白い羽毛は深紅に染まっている。

「ぼくはヒューダーのいるところへ行く。ヤスウ、あとをよろしく。マミヤを……」

建物のふちにかけていた指先を、翼竜は突き放す。ヤスウの視界は左右十数メートルはある翼で覆われる。夕陽の陰影を伴った白い羽毛はこの世のものではないようだった。

「変わった知り合いがおるな」

落ち着いた声はメンドルプのものだ。ヤスウと並んで、みるみる高く小さくなっていく翼竜を見送る。「彼は何処[いずこ]へ？」

ヤスウは言い淀んだ。イリチヤは「ヒューダーが呼んでいるところへ」とだけ言った。ヤスウにはそれがどこなのか、わからない。肩に手の重さを感じて、困惑した目でメンドルプを仰ぎ見る。

メンドルプはつぶやいた。「——もしや——」

ヤスウは、えっ、となった。「先生にはわかるんですか、心当たりがあるんすか！！？」

「ヤスウ、そなたの仲間、ダーヴェとヒューダーとは巨人族の謎を追っていると言うたな？」

「そ、そうなんだ！！ メッサナも大問題、評議会も大問題なんすが、こっちも大問題なんすよ！！」

ヤスウ、と、メンドルプは大きな手でヤスウの両手を包んだ。「落ち着きなさい、落ち着くのだ」

「んなこと言ったって——！！ またおれだけ取り残されちゃって——！！」

半泣きになりながら、ヤスウは、マーケットの人混みのなかで思わず声をかけたくなくなるような姿が目飛び込んできたときの、高揚感とも安堵感とも肯定感ともつかない、陽性の心持ちを思い出した。そして、己がどれほど孤独の中にいたのかを知った。

「ヤスウ、人にはそれぞれ役割がある。そなたとて、空を飛べる者。あの翼竜とともに行くこともできたのではないか？」

「そりゃそうだけど……けど……あとを任されちゃあ」

「そう。それがそなただ。ヤスウ。そなたはあとを任されたのだよ」

ヤスウはふたたび、そんなこと言ったって、と言いたそうな顔で顔をゆがめた。任されたというより押し付けられた感が大きいのである。

メンドルプはそんなヤスウの表情をしばらく眺めてから、声を落として言った。「そなたは秘密を守れるか？」

「え」

「黄金を作るに匹敵する、偉大にしてきわめて危険な秘密じゃ……」

＊

アンベレオ王国は世界屈指の工業国にして経済大国、貿易もたいへん盛んに行われていた。

かたや、メッサナは世界に冠たる知と美の殿堂。ここで学んだ人材は数多く、世界的に精神的影響力は計り知れないものがあつた。

同一の国の中にありながら、このふたつが真っ二つに割れてしまった。それは世界が

ふたつに割れることを意味していた。

第十章 『二極世界』

第十一章へ続く

第十章のあとがき

ここまでが第二部ということになります。
今までだいたい二十話を目安にしてひとつの章をまとめてたところを、今回六話ですからちょっと少ないです。（ちょっとか？）

本編が短くなってしまった分、参考になっている地図を下につけておきますので、興味のある方もそうでない方もお楽しみください。『アトランティス時代の地図』4枚です。

まあ、先のことを考えると…次からは世界の果ての島編になりそうなので…この辺で仕切りなおそうと思ひまして、いろいろ模索しておりました。模索ついでに資料の整理もと思ひ立ち、ブログを立ち上げたりなんかしていたので、インターバルが乱れている次第でございます。

ブログのタイトルは『[世界の果ての島より](#)』

物語は『世界の果ての島』から始まりましたから。

最初に取り上げたのが、二万年前の日本でした。日本列島に確実に人が住んでいた年代、その証拠と言えるのが加工された黒曜石です。石器だけなら原始的な人々が獣を狩って暮らしていたのだろうと考えられますが、同時期の世界に目を転じれば、神智学や人智学の文献によると、そのころはアトランティス文明が終末に向かっていて、同時に現代に生きる人類の種が蒔かれた揺籃期でもあったのだといひます。ならば、日本の黒曜石の遺物には、原始的な人々が獣を狩っていた以上の意味があるのでは！ 行ってみたい！ 二万年前の星ヶ塔や星ヶ台や星ヶ峠（←実在の地名です）で誰が何をしていたのか見てみたい！！ と思っていたところで出会ったのがホツマツタエだったのです。

この書に記されているのはいったいいつの時代か。

ざっくり言って、ウガヤまでは神さま、次の神武天皇の代からは人間だよね、読んでみると（自分に合った訳を見つけることをお勧めします）そう感じます。神武以降はおそらく弥生時代。しかし、それ以前は——いくつか例をあげることができますが、あとがきばかり長くなるのもなんですから割愛することにして、なにしろ——膨大な、膨大な時間の経過を感じるゆえに、かつて日本に住んで黒曜石を削っていた人々はアトランティス時代の中にいた何者かであり、アトランティス時代の日本といひていいんじゃないかと。

現在の周波数とかつてのそれは異なる、といひます。

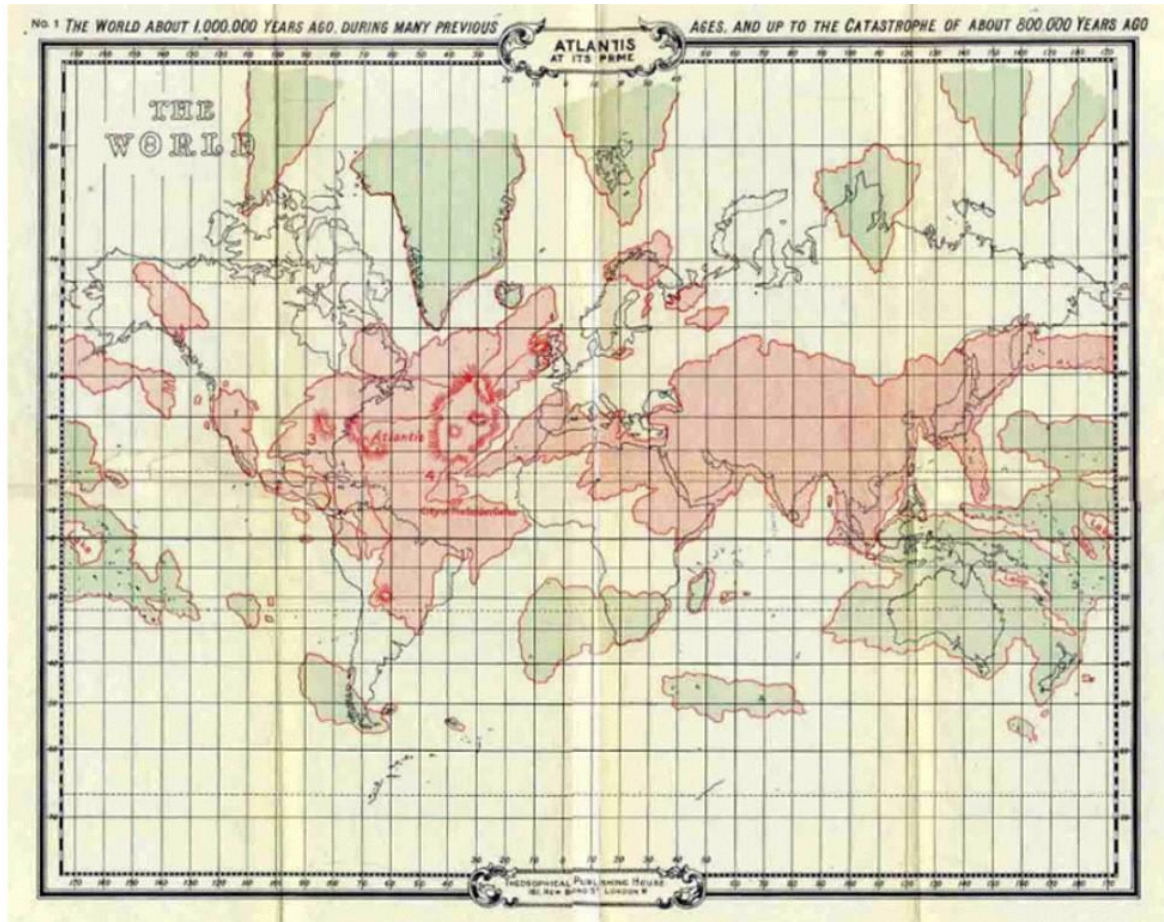
石の遺物や石の建造物のようなものがなぜ今も残っていて目にすることができるのか。それはむしろ、現在の物質的な周波数に合う物しか見ることができないということらしいです。

『石』に付随するもっと高次の要素、精神性は、今の時代、見ることはできないのです。

アトランティスの歴史

地理的、歴史的、民族学的スケッチより

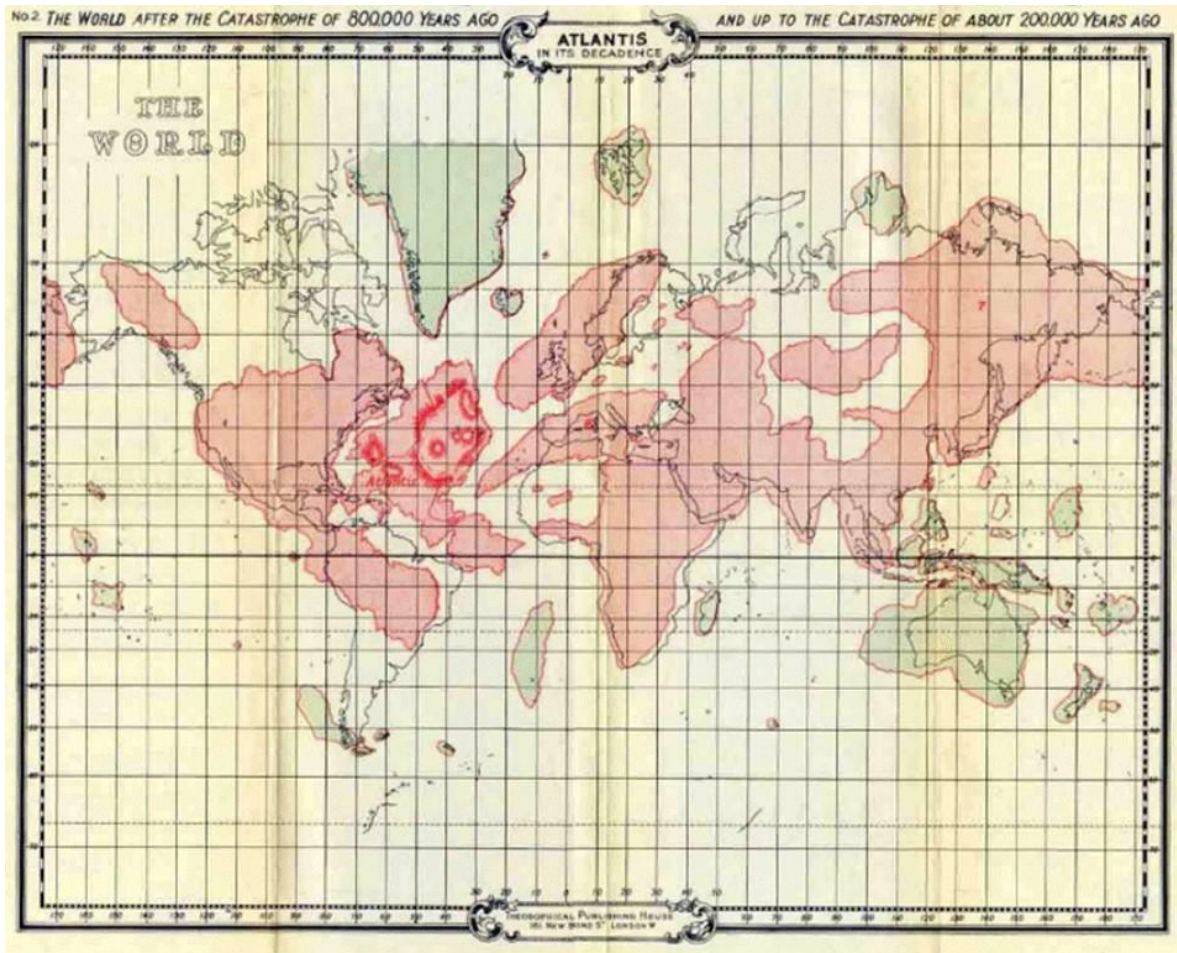
- ・地図1：百万年から八十万年前まで



アトランティスはアイスランドの数度東から現在のリオデジャネイロの地まで拡がり、テキサス、メキシコ湾、アメリカ南部、及び東部諸州、ラブラドル、ラブラドルからアイスランドに至る地域、スコットランド、及び北イングランドの小部分にまで伸びていた。さらにブラジルからアフリカの黄金海岸にも達した。

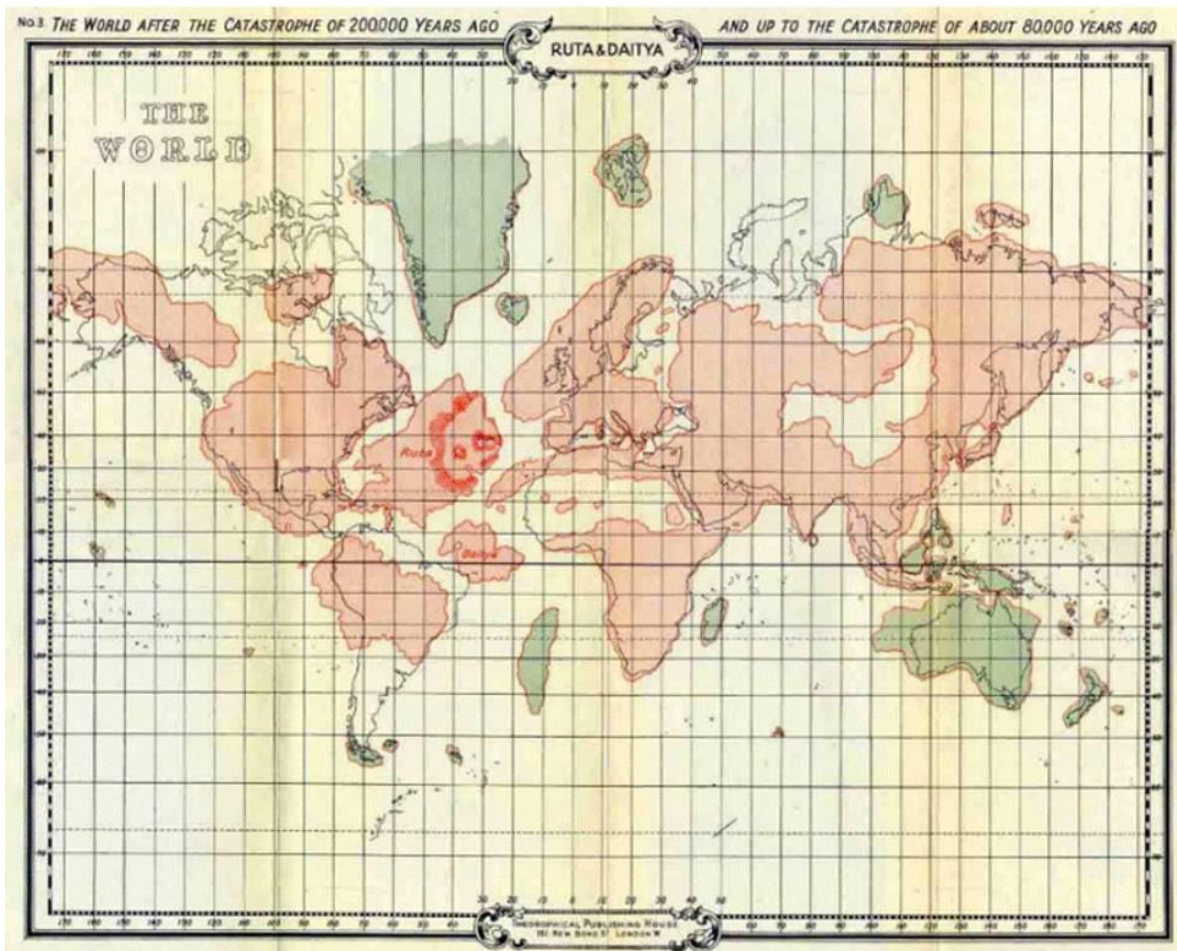
なお、これらの地図にはさらに古い、非常に広範な大陸、第二根幹人種が住んでいたハイパーボア（人智学ではヒュペルボレアス）大陸も示され、（第三根幹のレムリア大陸のように）青で着色されている。

- ・地図2：八十万年から二十万年前まで



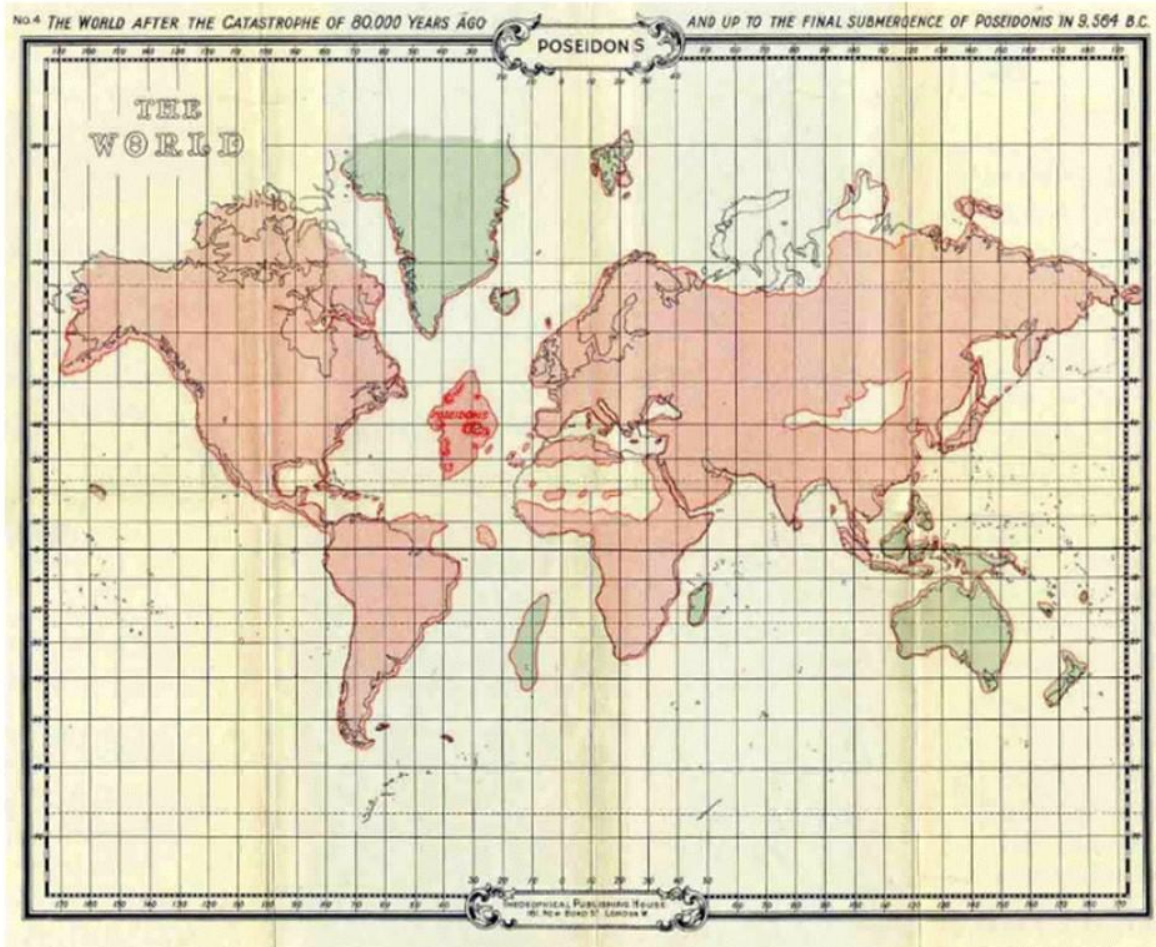
第三期中新世の約八十万年前に起きた第一次破局のもので、大陸北部の大部分は水没し、残りも甚だしく引き裂かれた。成長しつつあったアメリカ大陸はアトランティス大陸の残部（北緯50度から赤道の南緯数度に至る大西洋盆地を占めた）と切り離された。世界の他の地域でも相当陥没・隆起が起こり、例えば今のイギリス諸島はスカンジナビア半島、北フランス、およびその間の海ならびに若干の周辺の海を包含する巨大な島の一部であった。

- ・地図3：二十万年から八万年前（正確には紀元前75,025年）まで



約二十万年まえの第二次激変ののちの地表を表す。しかしこの激変の規模は第一次よりもずっと小さかった。
 アトランティス本島は今やルタという北の島とダイティヤという南の島とに引き裂かれた。未来の南北アメリカも互いに分かれ分かれとなり、エジプトは水没、スカンジナビアは未来のヨーロッパにつながった。

- ・地図4：八万年から紀元前9,564年まで



紀元前75,025年に起きた大激変後の地表を表す。ダイティヤはほぼ消滅、ルタは縮小して比較的小さな、大西洋のほぼ真ん中のポセイドニスという島になった。地表はほぼ現在の状態に近いが、イギリス諸島はまだヨーロッパにつながり、バルチック海（バルト海）は存在せず、サハラ砂漠はまだ大海であった。

転載元

[The Story of Atlantis A Geographical, Historical and Ethnological Sketch, 1896
Paris - Editions](#)

2022年8月1日 記

奥付

Salamander in the circle

第十章 二極世界

2022年8月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「月とサカナ」 <http://snao.sakura.ne.jp/>

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
